

## 週日の説教

金 大烈 神父 2010年11月2日(火)

### 《『死』について正しい理解を求めましょう - 永遠の命に入る門 - 》

私たちの信仰の目的は何でしょうか。簡単に申し上げますと、信仰の最後の目的は、『永遠の命』です。しかし私たちは、信仰者であるのにもかかわらず、その一番根本的な目的、いつも頭に置いておかなければならない目的を忘れて生活しています。『永遠の命』を考えられるかどうかで、私達の今の信仰生活が上手く行っているかどうかすぐに分かります。もし『永遠の命』が目的であることを意識できれば、何かあっても我慢できるでしょう。がっかりするようなことがあっても、“私達には『永遠の命』がある”という気持ちで何とか乗り越えられるでしょう。しかし私たちは、いつも不安や恐れを感じています。ということは、『永遠の命』をあまり意識していない証拠だと思えます。

使徒パウロは、【ローマの信徒におくる手紙 6章8節】で、「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることもなると信じます。」と言っています。生きているのに、「キリストと共に死んだ」という表現を使っていますが、この言葉は、どういう意味でしょうか？「キリストと共に死んだ」というのは、「キリストの死に与った」ということです。では、「キリストの死に与る」とは、どういうことでしょうか？

『死』は、恐れるべきものでしょうか。それとも恐れるべきでないものでしょうか。皆様は、『死』というものが怖くありませんか？皆様もいつか死にぶつかります。それは怖いものでしょうか、それとも怖くないものでしょうか？怖いですよ。私も怖いです。では、イエス様はどうでしたか？イエス様も怖かったのです。だから、「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。」(ルカ 22・41)と強く願いましたね。そして、「しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」と続けています。つまり、イエス様も怖かったのです。

死を怖くないと思う人はおろかです。「キリストと共に死んだ」という言葉は、「イエス様が乗り越えた死の意味に与ります。」ということです。イエス様は今日の福音(ヨハネ 6・37-40)の最後に、「わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」とおっしゃっています。私達はいくら信仰が深くても、自分に死が近づいてくることを考えるとやはり心が震えます、緊張します。しかし、イエス様のこの御言葉を聞かなかった人よりは、笑顔で受け入れられるでしょう。もちろん、つらくて、怖くて、どのようになるのだろうかという疑いも生じると思います。しかし、イエス様は永遠の命を約束されたのです。結局、信仰というのは、それ(イエス様が永遠の命を約束されたこと)を信じることです。

ある小説家が、「人間は病気によって死ぬのではなく、死という病気によって死ぬ。」と言いました。この言葉の意味は、「人間は、癌などのいろいろな病気にかかって死ぬと思っているが、実は、生まれた瞬間から、『死』という慢性的な病気にかかっている。」ということです。結局誰でも死を避けられ

ない、ということです。そして『死』の意味は、私たちがどのように『死』を理解するかによって変わってきます。『死』を本当に最後まで怖がりながら、震えながら、拒みながら、受け取るのか、それとも、緊張感はあるけれど希望として考えられるかによって『死』の意味は違ってきます。キリスト信者として、「私はこれで終わりではない。私たちがキリストと一緒に死んだのだから、キリストも私たちと一緒にいらっしゃる」という強い信仰が『死』に対して何よりも必要でしょう。

私も、いつか自分に訪れる『死』を考えると、いろいろな感情になりますが、最後に感じるのは『怖さ』です。では、この『怖さ』を出来るだけ減らす方法があるのでしょうか。ただ一つだけあります。生きているうちに、み旨にかなう心や振る舞いを見せようとする事です。そして、「いろいろな間違えもあり、罪も犯しましたが、少なくとも頑張りました。」と言えれば、何とか死を受け入れられるのではないのでしょうか。

11月は、亡くなった方を思い出し、その霊のために祈る月です。「死についての深い正しい理解を求める」恵みあふれる時期になっていただきたいと思います。死は確かに怖いものかもしれませんが。しかしキリストは、ご自分でも怖いと思いつつも、模範を見せてくださいました。

死は永遠の命に入る門であり、その門に入るのはそんなにたやすいことではありません。そして、そのためには心を痛める自分との闘いがあります。それを分かってほしいという思いで、イエス様は、ご自分の死を見せてくださいました。

信仰の道の最後は、『永遠の命』です。もしそれを希望として心に置ければ、もっと明るくこの世の中を生きられると思います。イエス様も怖かったのです。しかし私たちのために、死はそんなに怖がるものではないことを知らせ、永遠の命を紹介するために、自ら十字架を負ったのです。それを心に刻みましょう。

ありがとうございました。

付け加えます。

死にたいと思って、自殺する人がいます。生きるより死ぬほうがよいと思い、口で「死にたい」と言うだけでなく、実際に自殺を図り、自殺してしまう人です。私たちは、このような人をどのように理解すればよいのでしょうか。

もし皆様の中に自殺したい人がいたらどうしますか？ 先ず、どのくらいつらくて自殺したい気持ちになったのか、理解してあげなければなりません。何の希望も、何の面白さもなく、生きる意味を完全に失ったから自殺しようと思ったのでしょうか。もし皆様が、全ての生きる意味を失い、命を終えたい、という気持ちになったらどうしますか？ 覚えておいてください。私たちには、命に対しては絶対に権限がありません。だから、自殺を図った人々はミサに与れません。自殺をした人のためのミサの意向もあまり勧めていません。もちろん、苦しくて自ら命を絶ったのですから、悲しむ遺族のためにミサをしますが、お葬式のミサはできません。カトリック信者の中にも自殺する人はいます。しかし

自殺は、カトリック教会が2000年間に定めた罪の中でも一番大きい罪の中で一つです。自殺するということは、イエス様に頼らなかった、ということです。信仰の真の意味について、全然分からなかった、ということです。だからこのような結論になっているのでしょう。もちろん、医学的に見て、自分の脳のコントロールができなくて自殺をしてしまう人もいます。しかし、教会はそれさえ絶対に許しません。「自殺した人は、絶対に永遠の命は得られない」というはっきりした教会の教えがあります。どんな理由があっても、言い訳はできません。他の人と自殺について話し合う時には、命の尊さ、いつかは神様に返さなければならないこと、呼びかけがなければ自分勝手には何もできないことを分かち合えればよいと思います。